

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 7 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2009～2012

課題番号：21251003

研究課題名（和文） レバノン・シリア移民の創り出す地域—宗派体制・クライエンテリズム・市民社会

研究課題名（英文） Space created by Lebanese and Syrian migrants: Confessionalism, clientelism, and civil society

研究代表者

黒木 英充 (KUROKI HIDEMITSU)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号：20195580

研究成果の概要（和文）：

レバノン・シリア移民の4波に分かたれる移住の歴史的過程と、移住先における社会上昇について把握したうえで、世界各地にて現地調査を行った。その結果、移住先と故国とを結びつける移民のネットワークの重層する構造を明らかにし、移民が移住先の市民社会に接したことにより故国の政治体制に対し積極的な働きかけを行う動きがある一方、故国のクライエンテリズムが移民をなお強く拘束する影響力を持ち続けていること、などを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

Our over-seas field research on Lebanese and Syrian migrants was based on a common understanding of the historical development of their migration (four “waves” have been observed since the end of the nineteenth century) and their upward social mobility in their host societies. The research shed a new light on 1) the multi-layered structure of migrants’ networks, which connect them with their countries of origin, 2) their activities, which have the potential to transform the sectarian nature of the Lebanese and Syrian political systems, through the migrants’ living in the civil societies of the host countries, and 3) the strong clientelism of their homelands, which nevertheless retains the migrants within a sectarian framework through their multi-layered networks.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	10,100,000	3,030,000	13,130,000
2010年度	6,900,000	2,070,000	8,970,000
2011年度	7,600,000	2,280,000	9,880,000
2012年度	5,100,000	1,530,000	6,630,000
年度			
総計	29,700,000	8,910,000	38,610,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：宗派紛争、パトロン・クライエント関係、市民社会、在外投票権、移民文学、記憶、ディアスポラ、内戦

1. 研究開始当初の背景

レバノン・シリア移民が中南米・北米・西
アフリカ・西欧・オセアニアを中心にグロー

バルに拡散し、その人口規模に比して著しく
高いパフォーマンスを見せていること、そし
て故国のレバノン・シリアを初め中東地域に

対して大きな影響力を及ぼしていることは、日本ではほとんど知られていなかった。海外の関連研究界では当該移民のプッシュ・プルそれぞれの要因に関する研究や、各国における移民の時系列的な発展や国民統合・エスニシティに関する研究が進められていたが、移民が結ぶ地域間関係は未だ注目されていない状況であった。地球規模で人間の移動が劇的に進展し、そこで個人が形成するネットワークの意味が重要性を増す現代において、この特異な性格を持つレバノン・シリア移民について総合的な調査研究を行うことに大きな意味を見出した。

2. 研究の目的

レバノン・シリアそれぞれの地域から中南米・北米・西欧・西アフリカ・オセアニア各地へ拡散した移民の移住の時期・経緯について確認しながら、

- (1) 実際にかいなるネットワークが移民を故国と結びつけているのか
- (2) レバノンの宗派体制・シリアの宗派的色彩の濃厚な独裁体制と、移民先の市民社会との差異を移民がどのようにとらえているのか
- (3) レバノン・シリアの地域で伝統的に人間関係を強く規定してきたクライエントリズムが移住先のネットワーク形成にかいなる影響を与えてきたかを明らかにすることを目的とした。

また同時に、世界的規模で拡散し、人口規模でレバノン・シリア移民をはるかにしのぐ華人移民のケースと比較する視点を維持することとした。

3. 研究の方法

研究代表者、研究分担者、連携研究者の専門とする地域はレバノン・シリア、エジプトほかムスリム諸国、ブラジル、スペイン語圏中南米、西アフリカ、台湾など華人文化圏諸国であり、現地調査経験の豊富な研究者を揃えた。これにレバノンでフィールド調査経験のある若手研究者を研究協力者に加え、全員によるレバノン調査を実施した後、世界各地の移民調査に分散する、という手法をとった。

レバノンでは東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の海外研究拠点「中東研究日本センター」を足場として利用した。調査地はカナダ、合衆国、メキシコ、コロンビア、ブラジル、アルゼンチン、イギリス、フランス、トルコ、レバノン、セネガル、オーストラリア、ニュージーランドの13ヶ国に及び、各地で当該問題の研究者、教会・モスクなどにおける宗教組織、同郷人組織、商工会議所、商店街等を訪問してインタビューを行い、資料館などで資料調査を行った。レバノンのほかブラジル、アルゼンチン、セネガル、オーストラリアに関しては3人以上のメ

ンバーが同道して調査し、複眼的な調査を行うことができた。

毎年、年度初めと年度途中で研究打ち合わせ会合を持ち、各自の調査研究の進捗状況を確認し合った。また、海外の関連研究者を招聘しての国際ワークショップと講演会を開催し、海外で同時に目覚ましく進行しつつあるレバノン・シリア移民研究の最新状況について情報を収集するとともに、研究者間のネットワーク拡大にも努めた。

4. 研究成果

現在、調査研究の成果に基づく報告論集を作成中であるが、要約すると以下のような知見が得られた。

(1) レバノン・シリア地域からの移民は、19世紀末から第一次世界大戦にかけての第1波、第二次世界大戦後から1960年代にかけての第2波、レバノン内戦期(1975-1990年)の第3波、2005年頃から今日、シリア内戦期(2011年-)の第4波に分かたれる。第1波では移民の大半がレバノン山地とシリア中部農村部のキリスト教徒住民で、南北アメリカ大陸を中心に西アフリカ・オセアニアにまで移住した。これは東・南欧地域から南北アメリカ大陸への膨大な数の移民の時期に当たり、地中海の諸港から同じ船舶で渡航したことになる。現在、この子孫は第3-5世代目を形成しており、各地で主に商業を通じて社会的上昇を遂げている。第2波ではキリスト教徒のみならずムスリムも加わり、農村部のみならず都市部からの移住も始まったが、北米・西欧・オセアニアに加えて、オイルブームに沸く湾岸アラブ諸国への移民も増加した。第3波でもその傾向は一層強まったが、とりわけ高学歴層・富裕層の流出が顕著となった。第4波では、レバノンで継続する政情不安に加えて、シリアでの内戦が社会のインフラそのものの破壊につながったことから、特に後者のケースにおいて膨大な数の難民が隣接する国々において生じており、とりわけ割合からするとキリスト教徒住民の劇的な減少が観察されている。

(2) レバノン・シリア移民を故国と結びつけているネットワークは、第1に家族・親族の紐帯(しばしばムラ的人間関係に連続)、第2に移住先に新しく設立した東方キリスト教諸宗派の教会、第3に特にブラジルにおいて顕著に見られるところの同郷人クラブ、第4にレバノン人協会といった世俗的組織である。同郷人クラブやレバノン人協会も設立時期や発起人によって宗派色・政治色は様々であり、また東方キリスト教の教会も、必ずしも同一宗派に排他的に限定することなく、他宗派の移民を受け入れることがある。これらが重層するなかで、移民は使えるカードを可能な限り多く持とうとする傾向にある。

(3) 第1波・第2波の移民の多くは、移住先の市民社会の価値を重視し、そこに溶け込んで生活基盤を確立しているがゆえに、レバノンの宗派体制やシリアの一元独裁体制(宗派色を隠し持つ)に批判的な傾向が強い。一方、第3波・第4波の移民になると、故国の政治的な運動にコミットするケースが多く、合衆国における圧力団体活動に積極的に関与する場合もある。

(4) レバノンの国会議員選挙の際に明確に発現するのが、第3波・第4波移民のうちレバノン選挙権を保持する者たちの帰国投票行動におけるクライエンテリズムの持続性である。故国の村における派閥的な対抗関係が、投票のために一時帰国する移民に対し、その帰属する親族と同様の、すなわちレバノンの政治過程において依然強い影響力を持つクライエンテリズムに拘束された投票行動をとらせることとなる。万単位の人々に帰国のための航空券まで支給されるという現実が、レバノンの政治社会のみならずそれをとりまく国際政治の介入的構造の強固さと動員力とを示している。これは上で触れた重層的ネットワークが機能していることの証左でもある。一方、このクライエンテリズムが移住先の社会において移民のネットワーク自体の拡大にどのような影響を及ぼしたかについては、十分な考察を加えるまでに至らなかったが、第1波移民の行商・卸売商・都市商店主といった階層構造において一定の影響力を持ったであろうことが推測されている。

(5) 本科研の実施期間中にチュニジア・エジプトを初めとするアラブ諸国での市民の街頭行動による政権転覆、シリアにおける反政府運動の高まりと内戦突入という劇的な政治変化が生じた。この事態において移民が果たしている役割の問題に対して、海外調査で本格的に取り組むまでには至らなかったが、在外シリア人組織やレバノン人組織の活動がもたらしている影響力がすこぶる大きいことは、報道や最近の研究を通じて十分に確認できる。これら移民と本国の活動家らとの連携・断絶というダイナミックで微妙な過程が、大きな振幅のなかで進行中である。宗派主義・クライエンテリズム・市民社会という問題が凝縮する局面が観察されている。

(6) こうした移民の移住先での活動のうち、文化的な領域、特に文学や映画、美術といった各方面で顕著なものも多くみられる。これらについての分析も今後の課題として浮上したが、アルゼンチンでレバノン移民の子孫がそのルーツを訪ねるドキュメンタリー映画を企画・製作するところに本科研メンバーが立ち会い、レバノンの関係者を紹介・助言するなど協力できたのは、ささやかな成果の一つとして数えられるであろう。(同映画は

レバノン、アルゼンチン両国の映画祭で上映されたほか、国際衛星放送局アルジャズィーラの番組として放映された。) またブラジルのマロン派教会サンパウロ主教座では、メンバーが衛星放送番組に出演して、主教と対談しつつ本科研の活動について説明する、という形で現地社会への発信も実現できた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

- ① 真島一郎, 鏡像のエネルギー危機—セネガルから, SEEDer, 査読無, 8, 2013, 68-72.
- ② 飯塚正人, 「アラブ革命」再考—2011年市民決起の真相, 中東研究, 査読無, 514, 2012, 14-20.
- ③ 黒木英充, グローバル時代のレバノン料理(第1回)—レバノン料理の世界的普及, Vesta, 査読無, 82, 2011, 54-57.
- ④ 黒木英充, レバノンとアラブ「二〇一一年革命」, 現代思想, 査読無, 39-4, 2011, 194-199.
- ⑤ 鈴木茂, 南北戦争とラテンアメリカ—ジェラルド・ホーン『最も遠い南部—アメリカ合衆国、ブラジルとアフリカ奴隷貿易』(2007年)によせて, アメリカ史研究, 査読有, 34, 2011, 84-95.
- ⑥ 飯島みどり, 七十年を経て甦る死者たち—スペイン・「歴史的記憶」回復の闘い, 世界, 査読無, 811, 2010, 218-225.

[学会発表] (計 13 件)

- ① 黒木英充, レバノン・シリア移民のネットワーク—その現況説明と起源に関わる試論, 帝国史研究会第9回例会, 2013年3月23日, 武蔵大学.
- ② 黒木英充, シリア内戦の歴史的要因—社会変動と国際的介入の複合, 公開シンポジウム「混迷のシリアを読み解く」, 2013年1月27日, 東京大学駒場キャンパス.
- ③ 黒木英充, 東アラブ地域におけるエスニシティと宗派主義の批判的再検討, 史学会大会公開シンポジウム「エスニシティと歴史学」, 2012年11月10日, 東京大学本郷キャンパス.

- ④ Yuko Mio, An Anthropological Perspective on Migration of Chinese Origin, 北京大学華僑華人講座系列(二), May 2, 2012, 北京大学, 中国.
- ⑤ Hidemitsu Kuroki, Dragomanity: A Hypothesis on the Origin of Networking Abilities of Modern Lebanese and Syrian Migrants, Lecture of Middle East Institute, March 23, 2012, The National University of Singapore, Singapore.
- ⑥ Hidemitsu Kuroki, Aleppo Revolts in Urban-Rural Settings (1775-1850), Urban Violence in the Middle East, December 9, 2011, Zentrum Moderner Orient, Germany.
- ⑦ Hidemitsu Kuroki, Neither 'Western' or 'Orthodox': Establishing Greek Catholic Identity in the Ottoman Empire and Beyond, Religious Conflict, Religious Concord in the Mediterranean World, October 29, 2011, Institute of Advanced Asian Studies, The University of Tokyo.
- ⑧ Shigeru Suzuki, Los movimientos de los afro-descendientes en Brasil, Estado, Ciudadanía y Movimientos Sociales en Tiempos de Globalización en las Américas, September 6, 2011, Instituto de Estudios Peruanos, Peru.
- ⑨ Hidemitsu Kuroki, A quest for the origin of high mobility and networking ability of Lebanese and Syrian migrants: Its historical backgrounds and contemporary dynamics, Migrations, Mobility and Globalization: 2nd Symposium of Consortium for Asian and African Studies, November 26, 2010, INALCO, France.
- ⑩ 飯塚正人, 民主主義とイスラーム, 国立大学附置研究所・センター長会議第3部会シンポジウム「民主主義の行方」, 2010年11月5日, 東京大学東洋文化研究所.
- ⑪ Yuko Mio, The Indigenization and Re-sinicization of People of Chinese Origin in Central Vietnam, 2010 International Conference on Vietnamese and Taiwanese Studies, October 17, 2010, 国立成功大学、台南

(台湾) .

- ⑫ Hidemitsu Kuroki, Too Many Enemies: Emergence of a *Millet* for Greek Catholics in the Eighteenth and Nineteenth Centuries, International Symposium: The Otherness and Beyond, December 5, 2009, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.
- ⑬ Hidemitsu Kuroki, Our Aims of Lebanese Migration Studies, Information Exchange Meeting on Lebanese Migration Studies, August 17, 2009, Notre Dame University-Lebanon.

[図書] (計6件)

- ① 三尾裕子 (編著), 弘文堂, グローバリゼーションズー人類学・歴史学・地域研究の現場から, 床呂郁哉と共編, 2012, 368.
- ② 飯塚正人, 黒木英充, 東京外国語大学出版会, <アラブ大変動>を読む, 酒井啓子 (編著), 2011, 235, pp. 79-90 (イスラームと民主主義を考える), pp. 91-103 (アラブ革命の歴史的背景とレバノン・シリア).
- ③ 真島一郎 (編著), 平凡社, 二〇世紀<アフリカ>の個体形成, 2011, 768.
- ④ Hidemitsu Kuroki, Brill (Leiden), Syria and *Bilad al-Sham* under Ottoman Rule, Peter Sluglett & Stefan Weber (eds), 2010, xxi+633, pp. 421-439. (Account Books of Oppression and Bargaining: The Struggle for Justice and Profit in Ottoman Aleppo, 1784-90)
- ⑤ 黒木英充, 勉誠出版, ユーラシア諸宗教の関係史論, 深沢克己 (編), 2010, 307, pp. 171-199. (オスマン帝国におけるギリシア・カトリックのミレット成立—重層的環境における摩擦と受容)
- ⑥ 飯島みどり, 東京大学出版会, シリーズ伝統都市④分節構造, 吉田伸之・伊藤毅 (編), 2010, xiv+317, pp. 261-275. (ベンダーメキシコシティの小宇宙)

[その他]

ホームページ等

<https://sites.google.com/site/iminweb2012/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

黒木 英充 (KUROKI HIDEMITSU)
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授
研究者番号：20195580

(2) 研究分担者

飯塚 正人 (IIZUKA MASATO)
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授
研究者番号：90242073
鈴木 茂 (SUZUKI SHIGERU)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：10162950
真島 一郎 (MAJIMA ICHIRO)
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授
研究者番号：10251563
(H21, H24)

(3) 連携研究者

飯島 みどり (IIJIMA MIDORI)
立教大学・異文化コミュニケーション学部・准教授
研究者番号：20252124
三尾 裕子 (MIO YUKO)
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授
研究者番号：20195192